

2021年11月27日

待降節第一主日

菊地功大司教 メッセージ

典礼の暦は新しい一年を歩み始め、降誕祭に向けた準備のときである待降節が始まります。待降節の前半は、私たちの救いの完成の時に焦点を当て、後半は救い主の誕生を黙想するように私たちを招きます。

この二年ほどの間、私たちは感染症によってもたらされた命の危機と社会の混乱のただ中に身を置いてきました。想定外で発生したこの事態を通じて、私たちは神の計画が人知をはるかに超えていることをあらためて思い知らされています。人間が計画したことは、ことごとく立ち往生し、なすすべもなく私たちは立ちすくんでしまいました。

このような状況の中にいるからこそ、ルカ福音の言葉は、圧倒的な現実性を持って私たちに迫ってきます。「放蕩や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意なさい」と弟子たちに語られる主イエスは、「いつも目を覚まして祈りなさい」と促します。

パウロはテサロニケの教会への手紙で、「神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを」学んだ人々に、「その歩みを今後もさらに続けてください。わたしたちが主イエスによってどのように命令したか、あなた方はよく知っているはずです」と記しています。

「目を覚まして祈りなさい」という言葉は、単に覚醒していることを促しているのではなく、祈りのうちに「ときのしるし」を読み取り、主が命じられた生き方を続けていくことを求めます。私たちは、ただ座して何かを待っているのではなく、常に前進を続けながら行動的に主の時を待たなくてはなりません。今どのように行動するべきなのか。主はそれを、さまざまな「ときのしるし」を通じて示されています。今、感染症の状況のなかであって、私たちはどう生きるべきなのかを考えさせられていますが、まさしくこの状況における「ときのしるし」に心の目を開き、「神に喜ばれる」生き方を見出し、前進し続けましょう。

教会は今、ともに歩む道、シノドスの道と一緒に歩んでいます。今回のシノドスは、何かを議論して結論を出すこと以上に、教会が共同体であって、ともに支え合いながら道と一緒に歩んでいるのだという事実を、ともに心で感じ、皆の心に刻み込むことが一番の目的です。東京教区では、そのための一助として、現在、毎週のビデオを作成し配信しています。今更何を学ぶのかとお感じになるかも知れませんが、皆の思いを同じくするためにご覧いただければと思います。

私たちは、感染症の困難の中で、命を守るためには互いに助け合い支え合うことが不可欠であることをあらためて学びました。教会は連帯を呼びかけています。そもそも教会は救いの完成に向けてともに歩む神の民です。一緒になって「ときのしるし」を識別し、進むべき道を見だし、支え合いながら、神の国の完成に向かって歩んでまいります。

ただ、私たちの歩みは、漠然とした散歩ではありません。私たちは神に喜ばれる生き方をして前進することで、神の福音を社会に向けてあかしする存在になりたいと思います。私たち自身の教会のあり方を振り返ってみましょう。教会共同体は、福音をあかしする共同体となっていますか。教会共同体は、どのような形で、具体的に福音をあかししようとしていますか。あかしするために挑戦したいけれども、それが出来ない原因は何でしょうか。そもそも、「わたしたちの教会」という時の、「わたしたち」とは誰のことでしょうか。忘れ去られている人、気がつかれていない人はいないでしょうか。この待降節を、教会の振り返りの時、シノドスの歩みをともに歩むときとしましょう。